科目区分，学校教育基礎コース（教育学専修）
授業科目名，教育思想史概論

授業の明日に向けて

学校教育・伴野昌弘

１．授業の概要と工夫

本授業は、教育学部の２回生を対象（３回生、４回生でも受講可能）とした教科専門科目（選択必修）である。受講生の殆どの者は、３回生或いは４回生で教育実習を行うので、教育実習にも即応し役立ちうる「教育思想史概論」を視野に、シラバスに示した授業目的（「欧米の人物中心にその教育思想の読解を通して、歴史から学ぶ態度を体得し、教育という営みの現実性かつ理想追求性に関わる深い教養を身に付ける。」）が達成されるよう１５回の授業項目に則して講義した。以下三つの到達目標を記し、授業を概観しよう。到達目標（１）「教育学研究の広範な枠組みの中で、教育思想史を位置付け、意味付けることができる。」これは、授業のオリエンテーション（第１回）に対応した。即ち、教育学の一部門としての教育思想史とは何か、またそれを学ぶ意味を根本的に考察した。なかなか到達の困難な目標であり、本年の工夫として、歴史を学ぶ教育的意義を身近な問題から双方向的に考えようとした。到達目標（２）「広範多岐に亘る教育思想史を、代表的な人物と学説を中心に、その基礎的な文献読解を通して理解する。」これは、授業項目の第２回から第１３回に対応し、本講義の中軸となっている。ただ、取り上げるべき人物が多岐に亘り、結局はテキストに即した表面的な内容理解に終始し、主なプリント配布はしたものの、十分な文献理解にまで至らなかった点が反省される。到達目標（３）「現代社会の教育的諸問題の解決のために、各自それぞれのテーマを設定し、上記（２）の考察を基にその解決法の端緒的追究を試みる。」これは、授業項目の第１４回とレポートの課題（その２）に対応した。単なる机上の学問とならぬためにもこの観点は重要であり、学生は各自、主体的に作業を進め、貴重な探究を試みた。因みに本年度の受講生（１８人）の興味と関心によって取り上げられた教育思想史上の人物とその人数を示しておく。
ペスタロッチ（４人）、ルソー（３人）、フレーベル（２人）、コメニウス（２人）、ヘルバルト、デュルケーム、デューイ、サルトル、モンテッソリー等各１人。

２・学生達の反応

本年も授業全般に関わる感想、意見、印象的な点を自由に記してもらったが、まず授業内容に関し、数個の主な感想を挙げてみよう。①教育思想史を現代教育との繋がりで話されたのでよく理解できた。（特にコメニウスやペスタロッチと現代教育の関連には驚いた。）②ヘルバルトの「教育的教授」の意味の深さに感動した。③思想史を通して、教育の本質を学び、幅広い価値観を持つことができた。④「出来事としての歴史」と「叙述としての歴史」の考え方が面白い。⑤印象的なことは多いが、私は、「生きることは愛すること」など、この授業で愛をしっかり植え付けられたように思う。先生のこの姿勢を今後も続けて欲しい。

３・総括と反省

授業内容に関しては、学生達の反応は、上記のように概ね肯定的であった。授業方法に関しても、例年よく指摘される板書方など、本年は筆者の配慮で特に問題はなかった。ただ担当者として、よりよき授業（授業の明日）に向けて、今後も板書の重要な意味を伝えると共に、常に、より見易い板書を心掛けたい。また授業内容に応じて学生と話し合う時間を増やし、レポートも活用し、更なる双方向の授業を目指したい。そのためにもシラバスの内容項目をそれぞれ同等に理解させるよりも、重要度に強弱を付けて行うめりはりのある授業を今後も検討課題としたい。